はい
ママパパライン仙台です

「電話受け手ボランティア養成講座」報告

今回は新しい電話受け手を育てる目的から『電話受け手ボランティア養成講座』を企画し、11月19日・12月3日・10日の3日間で6講座を行いました。受け手希望者、現在の受け手、子育て支援に携わっている方など延べ 127 名が受講しました。講座ごとの感想を一部紹介いたします。

『傾聴ボランティアをする上での心得』

○聴かせてもらう、という受け手の姿勢がかけ手の「話して良い」という意識作りの第一歩。必要なのは「待つ支援」。

○共に感じるという事は、同情ではなく共感の意味を知った。内包しているのはその人のものでしかなく、聴き手の経験はあくまでも聴き手の感じ方に過ぎないということ。

○子どもは自分の気持ちを上手く言葉に出せない。大人も気持ちをつたえる言葉を持ち合わせていない。大人が日常の生活の中で、感情を言葉にして出すことが大事。

『乳幼児の子育て事情と支援について』

○『ワーク・ライフ・バラバラザンス』伝わりやすく自身の振り返りのきっかけにしやすい造語だと思った。「子どもがいる喜び」と「子育てしやすい街」のギャップに驚いたが、それでも産む親がいることに意味を考えたい。

○「ママたちの悩みの8割は友人が1人いれば解決する」確かに！と思った。「子どもが真ん中」にするには家族支援をする。親が楽しんでいれば子どもも楽しい。核家族になって色んな事が受け継がれなくなってしまった。それを地域でつながっていくことで受け繋がれる様になる。1人ではダメ。

『虐待など悩みのある家庭への理解』

○加害の背景に被害がある。目に見えない養育や愛着に対する意識の余地をもって相手を尊重し対話することが大切。等身大のその人の物語を聴く。

○サイレントベイビーがサイレントマザーになる。暴力と愛がセットになっている人がいる。ジャッジしないで伝える。解決を求めないコミュニティづくりが大事。

○電話をかけるには高度な力がいる。相談することを教育されてこなかった子育て親を孤立させない。安定した愛着が必要、抱っこ(ｽｷﾝｼｯﾌﾟ)の力。

『障害児の子育ての現状と社会支援について』

○障害を持つお母さんの「生の声」をきかせていただき、いろいろなご苦労があっても前向きに子どもにとって何が最善か、子どもの幸せを第一に考える姿勢に感動してうかがいました。誰かに受け止めてもらえれば乗り越えていける！傾聴もその1つになると信じて頑張ろう！！

○家族だけでなく社会を巻き込んだサポート体制が大切だと改めて感じました。通所先（デイサービス）以外で自分らしくいられる場所という言葉が印象的でした。もっと壁のない社会を考えたいと思います。

『自己理解と他者理解』

○自己理解と他者理解、それには自己評価と他者評価につながり、好き嫌いというオートマチックに働く無意識な部分が影響するという事を、客観的に知る事が出来た。

○相談を受ける際、受け手のバイアスが相談者に大きく反映してしまうということは認識していたつもりだったが、「ああ、あの時の相談は、自分が主役になっていた。」と気づくことが多々あった。

○共感とともに冷静さが必要。自分の弱点を知っておくこと。思わず夢中になってしまう話題の危険性。自分にとって十分に注意しなければならない。

『傾聴とロールプレイ』

○自衛的な笑い、自分が多用するからこそ難しいなと実感した。エクササイズで学ぶことは多けれど、ひとつひとつ丁寧に知ることが大切だと思った。

○傾聴の基本精神として相手の物語を共有して、言葉だけに反応せずに感情をつかむことが大事。相手と信頼関係を作って、初めて成り立ってゆく。自分を知る難しさ、聴き手の難しさを学ぶことが出来た。

○傾聴の難しさに、安易に取り組めないと思った。「感じとる目と心」大事に保っていきたい。